



優秀賞

「農業体験を通して感じたこと」

大仙市立大曲中学校 二年 藤田美波

私の家は八代続く米を生産する農家です。住んでいる地域は田んぼが多く、四季の移り変わりをしながら通学しています。春、植えられたばかりの苗は心細そうに風を受けていますが、夏になるとさわさわと気持ちよさそうに風になびき、風がわたる足跡を見る事ができます。私は、この絵に書いたような風景とこれらの季節がとても好きです。そして、穂が出て花が咲き、やがて黄色の秋を迎え、収穫の時となります。四季の移り変わりを、直に目にする、田舎は田舎の良さがあると思ひます。

私は今年の夏も、じゃが芋掘りをしました。真夏の太陽がジリジリと照るなか、汗がポタポタとしたり落ちるのもかまわず、夢中で土をかきだしました。コロコロとした芋が現れると、「いっぱい大きくなって、がんばったね。」と声をかけたい気持ちになりました。収穫の喜びを味わえるのも、家が農家だからだと思います。さっそくジャガバターにして食べました。

じゃが芋を掘り終わった畑は、後日、大根畑に様子が変わります。父母にたのまれ、種まきを手伝いました。二〜三粒ずつ赤い小さな種を穴に並べるように置いていきます。この小さな粒が、後には大きな白い大根によく成長するものだと、不思議な気持ちになります。そして、一息ついて汗をぬぐうと、ふと吹く風が涼しく感じ、ただ暑かったじゃが芋掘りとはちがう季節に移ったんだなと実感しました。

植物は根をはる土と、雨と太陽の光が育てるのはわかりますが、私はそこに、人の手の愛情が入ると良い作物が出来るのではないかなと思っています。人間も、米も野菜も、愛情をプラスする事

が大事だと思います。

今年三月十一日、とても大きな地震がありました。震度六は体験したことのないゆれで、とても恐かったのですが、幸いなことに、家には被災はなく、家族も皆無事でした。しかし、東北の太平洋側では津波の被災によって家や家族、会社や畑、友人、知人を失ってなげき悲しむ人々の様子をテレビ等で何度も見ました。私の通っている中学の同学年には福島からの転校生が一人います。秋田県は、大震災の被災が少なく、普通に暮らしている事は、実はとても幸せな事なのだと教えられました。

私の次兄は福島市に住んでいます。兄は大学生で、夏休みに帰省した際、福島の様子を教えてくださいました。田んぼや畑がせっかく無事で残っているのに、作物を作る事ができないそうです。放射能のせいです。作っても売れないのだそうです。もし、これが自分の住んでいる所で起きたならと思うと、ゾッとします。

父が新聞を見ながら、うなづいて難しい顔をしていました。関東の米からセシウムが検出されたそうです。

「秋田は大丈夫でよかったですね。」
「秋田は大丈夫でよかったですね。」
と私が言うと、父は教えてくれました。
「そうとは言えないよ。風評被害で米が売れなくなることもあるのだよ。」

今年には特に、新米より去年の米の方が安全だからと、人気が高く、値段も上がっているそうです。三度の食事は米、の我が家です。大きな口をあけて遠慮なく、日々安心して食べているごはんも食べられないとしたら考えただけで恐ろしくなります。土にも水にも恵まれた、まさに大地の恵み。手間をかけ、愛情をそそいだ物が無駄になったら、田畑がなくなったら生活はガラリと変わるでしょう。

十年後、三十年後、五十年後、百年後も、安心して土にさわることのできる日本であってほしいと思います。環境の大切さが身にしみてわかった夏でした。